

台湾出身戦歿者慰霊祭に臨んで

李登輝学校日本校友会理事長・本会理事

天目石要一郎あめいしやういちろう

発端は三宅教雄理事の講話

昨年暮れの十二月十七日、東京・奥多摩の笠松展望公園にて台湾出身戦歿者慰霊祭を行いました。

私どもは毎年、靖國神社で台湾出身戦歿者慰霊祭を行っていますが、この奥多摩での慰霊祭のきっかけは、昨年十一月二十三日に催した慰霊祭での三宅教雄みやけのりお・本会常務理事の講話でした。

奥多摩に台湾出身者戦歿者の慰霊碑があること、慰霊祭が最後に行われてから二十年近く経ち、今では訪ねる人もいないようだとのことでした。席上、「ぜひ訪ねてみましょう」という声があがり、この慰霊祭となりました。

当日は快晴の上に風もなく、十二月

とは言え、非常に過ごしやすいお天気の中で迎えることができました。

新宿から電車で二時間ほどの奥多摩駅、そこから最寄りの停留所までバスで三十分のこと。都心からはかなり遠いし不便だというのに、三宅理事など十一名の方が参集されました。車なら時間の節約になるかと、私は奥多摩駅に車で迎えにうかがいました。

車内での道中、英霊と同じく台湾出身で従軍された呉正男ごまさお・本会理事より、戦争当時の話や、戦後、ソ連軍にシベリアで抑留された過酷な体験をうかがうことができました。私にとってこの慰霊祭は先人を偲ぶことですが、呉理事にとっては共に戦った戦友に思いを馳せることだし、運命のいたずら



慰霊碑前にて祭文を奉読する天目石理事長（12月17日）

で慰霊される側になっていたかもしれないことなのだと思います。

戦後世代の私には歴史でも、呉理事には人生そのものなのだと思います。至りました。

さて、笠松展望公園は最寄りのバス停から橋を渡り、急な坂道を延々と登っていきます。おまけに、途中から舗装は途切れ、軽トラックでようやく通れるような細い林道を延々と歩いて、ようやくたどり着きます。舗装が途切れるところまでは車で登りましたが、



昭和50年に建立された慰霊碑に靖國神社の御神酒も献撰
(蕃刀を象った慰霊塔は同58年建立)

そこから二十分ほど林道を登ったでしようか。最寄りのバス停から歩くと四、五十分はかかります。奥多摩も東京ですが、東京都内だからと甘く見ると大変なことになります。

かく言う私も、お弁当持参と案内文に書かれていたにもかかわらず「途中にはコンビニもあるだろう」と甘くみて、結局はおにぎりやパンを分けてもらうことになりました。

話はそれましたが、林道を登っていきますと、台湾原住民の蕃刀ばんとうを象った慰

霊塔とどっしりとした慰霊碑が見えてきます。そこが笠松展望公園です。

台湾に向く慰霊碑前

公園と言っても、慰霊碑の前にて参加者全員で記念写真を撮ろうとする、シッターを押す人は崖から落ちそうになると言えば、どの程度の広さか想像がつくのではないでしようか。展望台という方がしっくりくる場所です。そこから奥多摩湖が見下ろせ、いつまでも見飽きない心安まる光景が広がっています。そして、慰霊碑はるか先の故郷台湾に向いています。

この慰霊碑の前で、参列者を代表して私が慰霊祭の祭文を読ませていただきました。祭文を読みながら、車中で呉理事の話や、李登輝先生が「戦争で死ぬ運命だと思っていたので、生とは何か、死とは何かと読み漁り、考え抜いた」と李登輝学校研修団でおっしゃっていた話をよぎりました。

そして、ここに眠る戦没者の英霊は

どのような思いであったのだろう、夢や希望に満ち溢れていたのではないだろうか、それらを志半ばで全て断念せざるをえなかったとは！ きっと、想像もつかない葛藤があったらだろうにと思うと、こみあげてくるものがあり、なかなか読み進めることができなくなりました。それでも、なんとか参列者の方々にご心配をかけながら役目を果たすことができました。

皆さまもぜひ一度、奥多摩の山深い場所にある笠松展望公園に足をお運びください。心休まる自然と景色の中、遥か台湾に向けて慰霊碑が建立されています。そして、皆さまが足を運んでくださるのを待っておられます。

ただ、慰霊碑はこのように参拝には少し不便なところにありますので、現在、移転の話が出ています。横浜市内の宗教法人と千葉県夷隅郡大多喜町の温泉旅館から申し出をいただいています。具体的な検討はこれから、いい方向に進めばと思う次第です。